

問題・解答 用紙番号	1
---------------	---

の解答用紙に解答しなさい。

国語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部【文系科目型】

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

プライヴァシーの変容について、一つの経験から始めよう。数年前訪れたアミューズメント施設でのことである。入場したときに私は、ICタグ付きのリストバンドを付与された。施設内ではそれを用いて買い物や食事をするのができ、ロッカーなどの認証にも使われていた。たしかに、便利ではあった。ここでの施設側の目的は明らかだろう。私の年齢層、性別、この施設でどのように動き、どんな消費活動を行なったのか。そして一緒に行った友人はどうなのか。そして別の友人は——。このような履歴を蓄積し、分析し、次のサービスの開発と提供に結びつける。個人のプロフィールと、消費の履歴との結びつきをデータとして蓄積すること。それがこのサービスの提供側にとっての根幹的な価値だろう。

自分自身で消費を行なうようになった年齢の人間で、類似の経験をしたことがない者は、まずいないだろう。いまや、数え切れない店舗や施設でポイント付与や割引、支払いの簡略化などという誘導のもとに「会員」や「カードの使用者」になることを勧められ、私たちは自分が何をどこで買ったのか、という消費行動の足跡を残し続けている。消費だけではない。なぜグーグルのメールやマップ、クラウド・スペース、スケジュールなど各種サービスは無料なのか。利用者たちが入力する情報を大規模に機械的に分析し、そこから導かれる知見を販売したり研究に生かしたりするビジネス・モデルが成立しているからである。なぜパスポートや運転免許証にICチップが付くようになったのか。人の移動や資格、状態にまつわる変更の履歴を蓄積し、利活用するためである。

とくにめざましいのはスマートフォンをはじめとする携帯端末をめぐる状況だろう。日本の携帯端末の使用履歴に紐付けされたデータベースには、いま恐ろしいほどの速度で、個人の消費や移動、

嗜好^{しこう}、コミュニケーション、表現行為、検索行為などの履歴が蓄積しつつある。通話やメールの送受信といった従来の機能に加え、ネットの閲覧・検索、電子マネー、乗車券、会員証、GPS通信、クーポンなど、いま携帯電話でとれただけ機能が統合されつつあるが、リストアップするといひ。

ここ二〇〜三〇年の間にコンビニエンスストア、レンタルビデオショップ、ネット書店、鉄道会社、有料道路公団、サーチエンジン、メールサービス、あるいは病院、図書館、税務署、警察、法務省、その他あらゆる個人の履歴を集め蓄積する機関が、データベースを構築している。私たち一人一人の個人のデータが——それが個人の名に結びついていることもあれば、単に番号だけのこともあるだろう——、そこには蓄積されているのである。

人々が残すこうした履歴データを、^Aライフログと呼ぶことがある——life log、まさに「人生の記録」だ——が、ライフログはなにも他者によって収集されるものだけではない。ブログや写真、動画、日記、メモ、メール、TwitterやFacebook、Instagramといったソーシャル・メディアへの投稿など、その人が自発的に記録し、公開するものも含まれる。ネット上にあふれる日記や個人の書き込みを見ていくと、まさにそこにはプライベートなこととしが呼びようがないことがらが、しばしば誰でも見られる状態におかれているのに出会う。同様の内容を、もしも他人が無断で公開したとするならば、重大なプライバシーの侵害事例となるであろうことが、自発的に^①シユウモクのもとにさらされている。

われわれは想像できる。もしも、これらの自動収集された／自発的に残されたライフログが、すべて統合され検索され分析されたならば——。そこに現われるのはジョージ・オーウェルが『一九八四年』で描いた「ビッグ・ブラザー」を超える超監視社会ではないのか、と。

事実、多くの論者が、ネット時代におけるプライバシー論の一つの焦点として、〈監視〉の問題を取り上げてきた。なぜなら監視の問題は、人々の〈私的領域〉のあり方、より正確に言えば人々の〈公〉と〈私〉を切り分ける境界線を変化させつつあるまさに原因の一つであると同時に、それ自体がネットワーク時代における社会の秩序そのものの問題でさえあるからである。デイヴィッド・ライアン『監視社会』はいふ。

監視という問題は、ここでは、社会学的関心の対象として考察される。それが、社会の秩序編成そのものに寄与するからだ。つまり、監視の「もう一つの顔」は、それが担う、社会的・経済的分割を強化する働き、選択を誘導し、欲望に方向を与え、いざとなれば^②ソクバク・管理するという働きに由来するのである。

〈監視〉を担っているテクノロジーや社会的装置は、たんに人々を見張っているというだけではなく、人々の配置や振舞い、欲望を 1 機能を持っているということである。同じような発想からマーク・ポスターも、フリーコアの提示した人々を規律訓練し主体化するモデルである^{*}パノプティコンを、「データベースの言説」の形と結びつけて論じた。「データベースの言説である超パノ

ブティコンは情報のポストモダン、脱工業社会における大衆制御の方法である。(中略) 民衆は超パノプティコンの規範化する眼差しに^③シエウヅクする主体として自らを自己構築することに参加しているのである」。ポスターは「データベースの言説」がいかに人々を主体化するのかについて必ずしも明確に論じてはいないが、われわれはすでにデータベースが編成する知の体系のなかで自己成形をせざるをえなくなっており、^B情報のネットワークが張り巡らされた社会のなかで生きるほかない時代にいる。

ネットワーク時代の監視は、かつて想像された「ビッグ・ブラザー」とはかなり異なっている。『一九八四年』の「ビッグ・ブラザー」は、あらゆる場所に配置されたテレスクリーンというテレビとカメラを兼ねたような器機によって監視と管理を行なっていた。ローレンス・レッシングはいう。「だがテレスクリーンのすばらしいところは、そこから何が見えるか原理的にはわかる、ということだ。テレスクリーンの視野は明らかだったから、ウインストン(主人公)はどこに隠れればいいかわかった。(中略) 今の世界はそうではない。自分のインターネット検索が監視されているかはわからない。カメラが自分を^X同定しようとしているかはわからない。(中略) どれも人の人生を記録するときに知らせてくれるほどの慎みはない」。われわれの生活はいまや、膨大な経路によってさまざまなコンピュータ・ネットワークに結びつけられているが、いつどこでどのように自分自身の情報が捉えられ集められているのかの全貌は、到底知ることはできないのである。

しかも問題は、だれが監視しているのかという主体が非常に見えにくくなっているということにある。今や監視の目や耳は、いたるところに遍在し、その所有者も多岐にわたっている。この事態を多くの論者が、「ビッグ・ブラザー」に代わるそれぞれの名で名指そうとしている。ビッグ・ブラウザ、リトル・ブラザー、ビッグ・エブリバディー、社会的オーケストレーション……

ビッグ・ブラウザはエリオット・スピッツァー司法長官(ニューヨーク州)が用いたとされる言葉である。それは「膨大な量の個人情報をストックしたデータベースの分散化と相互統合によって実現される」監視網である。リトル・ブラザーは、東浩紀が「情報自由論2002-2003」で用いた。東は「私たちの前に姿を現わしつつあるのは、単一の「ビッグブラザー」ではなく、無数の「リトルブラザー」たちが市民生活をたえず監視し、必要に応じて介入してくるような、より複雑で厄介な世界なのだ」という。ハワード・ラインゴールドに言わせれば、「何百万人もの人々がセンサー内蔵型のウェアラブル・コンピュータを身につけて生活する日が来るとしたら、そのときには人々が全体として集合的な監視者、つまり「ビッグ・エブリバディー」となりうるだろう」となる。

前掲のライアンは^C擬人化する比喻を避け、事態を「社会的オーケストレーション」と呼んでいる。「監視は今や一般化した社会現象」であり、「制度化されたモニタリングが、国家を一部としながらもその範囲をはるかに越えた多種多様な機関によって、常態的に遂行されている」。そして「監視社会」という概念は、固定された一状態ではなく、社会的な方向性、多分に重要な社会の深層的^Y趨勢^{ヨウセイ}。

を指し示している。それだから、私は、監視という継続的で双方向的なプロセスを含む「社会的オーケストレーション」のような何かが起こっていると考えたいのだ」。中心のない、複数の要素が連携して監視が成立する時代の把握として、この言葉は適切である。

もう一〇年以上前になるが一つの事例を思い出す。さまざまな論者がつかみだそうとしている監視の「社会的オーケストレーション」が、現在の日本において発動した例である。

事件は、二〇〇六年に起こった。Aさんが車で走行中に、当て逃げをされた。Aさんはその経緯をブログに書き、自身の車に設置してあった車載カメラの映像を添えて、警察に届け出た。しかし警察は、軽微な事故であったためか、さほど熱心に捜査しない。Aさんは、その不満もブログにエントリした。二〇〇七年の四月、Aさんは当て逃げされたときの映像をネットで公開すると同時に、ブログに車種、車両ナンバー、所有者Bさんの実名（一部伏せ字か）、住所の一部を記載した。

二ヶ月後、事態が急拡大する。だれかが2ちゃんねるに事件に関するスレッドを立てたのである。AさんのブログからBさんの個人情報^{*}がそのまま転載され、勤務先会社名とそのHPも記載された。ほぼ同時にYouTubeやニコニコ動画へも動画が転載された。数時間後にはBさんのMixShiのページが発見されコメント欄に書き込みがサットウ^④、会社の掲示板にも集中的な書き込みが始まった。翌朝には会社へ複数の電話がかかった。ネット上にはBさんの自宅とその付近の写真、車検証の写真までが公開された。Bさんの会社のウェブサイトは一時閉鎖になった。

その翌日にはネット上のニュースサイトが注目をはじめ、情報を配信した。その二日後に、事件の経過説明とBさんを解雇したという文章が会社のホームページに掲載される。数日後、ネットニュースのJ-CASTが一連の事件を記事として配信、excite、infoseek、livedoorなどのポータルサイトに掲載された。一週間ほど後には、フジテレビ、日本テレビ、テレビ朝日が相次いでニュースで取り上げ、同時にその映像がYouTubeに転載された。『朝日新聞』も朝刊で取り上げた。なおテレビ朝日の報道によれば、Bさんの自宅近辺には中傷ビラが複数貼られていたという。

気が重くなる事件だ。しかし、現実には起こり、いままも同じような出来事は起こり続けている。

どのような装置がオーケストレーションを起こして監視網を形成したのか、考えてみよう。ドライブレコーダ、車両番号のデータベース、ホームページ、ブログ、個人利用可能な動画配信サービス、2ちゃんねるという巨大掲示板、YouTube、ニコニコ動画など著名動画サービスとそのコミュニケーション機能、ネットのニュースサイト、MixShiの日記、ブログや日記などのコメント欄、現実世界での「攻撃」の一つの窓口電話回線、デジカメ画像、音声ファイルのアップロード・公開サービス、後追い報道を行なった従来型マスメディア（テレビ、新聞）、街頭ビラなど。もちろん、いまならここにLINEやTwitter、Facebook、Instagramなどが加わるだろう。

二つのことに気づくべきだと考える。一つは、監視網はすでにそこにあつたものではない、ということである。バラバラの状態では社会の各所に置かれていた情報や装置が、ある個人を特定し丸裸

にし攻撃を行なうために、一時的に、しかし一気に、一つに組織化される。右に列挙したデータベースや諸装置・諸サービスは、もちろん特定の個人への攻撃を目的としていたものではない。しかし、それが〈2〉される、ということが問題だ。車載カメラにしても動画配信サービスにしても日記にしても、本来の目的とは異なった使途に振り向けられ、総合的にそれが監視網として成立する。それを^D〈創発する監視網〉と呼ぶことができるかもしれない。各部分のもつ役割・機能を超える能力・機能が、その組織やシステム全体としての振舞いのなかに出現するという創発。監視はもともとそこにあつたわけではない。各部分はそれぞれ別の機能や目的のもので活動していた。ところがある一つの出来事をきっかけにそうしたさまざまな個別の装置やシステム、人（あるいはそのグループ）が急速に結びつき、組織化され、総体としてあらかじめそこに監視網が存在していたのと同じ効果を發揮するという事態である。

もう一つは、この監視が情報化されたネット社会の到来によつて可能になったものであるとはいえ、^Eデジタル・テクノロジーのみによつて説明されうるものではないということである。ネット社会の監視やプライバシーを論じる多くの論者は、この点においてしばしば重要な側面を見落としている。レッシングの「誰かがサイバー空間にいるとき、その人はこつちの実空間にもいる。誰かがサイバー空間の規範にさらされているとき、その人は同時に実空間のコミュニティの中でも生きている」という指摘は、重要である。

デジタル化されネットワークに接続された監視は「データベイルランス」(dataveillance)とも呼ばれ、人力では到底不可能な規模と常時性、網羅性を実現した。だが、それだけでは特定の個人への監視は創発しないし、Bさんの人生に襲いかかったような深刻なキョウイ^⑤にはならない。デジタルなネットワークと、既存の非デジタルな世界とが接合されたとき、私たちの生が真に深い影響を受けるのであり、そのためには社会内に分散的におかれた情報と装置を利用／転用する個々の人々の振舞いと意志がまず必要である。そしてそれらの必ずしも統一的な目標を持たない部分としての行為や意志が、ソーシャル・メディアやネット掲示板、ニュースサイト、コメント欄などのコミュニケーション装置に媒介されながら、全体として統合的な監視と攻撃の編み目が創発する。

いまやわれわれは、いつどこで執拗で網羅的な監視網が出現するかわからない世界に生きているのである。

(日比嘉高『プライバシーの誕生 モデル小説のトラブル史』)

*ビッグ・ブラザー…小説『一九八四年』に登場する独裁者。国民を過度に監視するたえとして用いられる。

*パノプティコン…中央の監視塔から監獄全体を監視できる円筒形の刑務所。フランスの哲学者ミシェル・フーコーが近代監視システムの起源として紹介した。

*2ちゃんねる…かつて日本最大規模であつたインターネット掲示板。多種多様な話題について匿名で自由に投

稿でき、特定の話題ごとに掲示板を設けることを「スレッドを立てる」と呼んだ。

問一 波線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① シュウモク

- ア 一定のシュウキで繰り返される出来事
- イ シュウイツな作品を後世に残した画家
- ウ 生まれ育った地でキョウシュウに浸る
- エ 著名な研究者がカンシュウした学術書
- オ コウシュウの面前で騒いではいけない

② ソクバク

- ア この部屋は窓がなくヘイソク感が漂う
- イ ソクリヨウ船で海流の調査を実施する
- ウ 帽子を被ってはいけないキソクがある
- エ 全員でケツソクして最高の結果を出す
- オ 納品が遅れている商品をサイソクする

③ ジュウジク

- ア 宮殿の中はいつも警備がゲンジュウだ
- イ 新しい燃料電池の開発にジュウジする
- ウ 足りていなかった部品をホジュウする
- エ 漁船のソウジュウには自信があつた父
- オ 社長はジュウナンな対応に長けている

④ サットウ

- ア 長男は慎重で用意シュウトウな性格だ
- イ 国賓にソウトウする待遇で歓迎された
- ウ 夜更けまで政治についてトウロンする
- エ ヒットウ株主から苛烈な質問を受ける
- オ 不公平にならぬようキントウに分ける

⑤ キョウイ

- ア 必要事項はイロウなく記入したはずだ
- イ 外国の資源にイヅンしすぎている現状
- ウ イフウ堂々とした態度に感銘を受ける
- エ ジンイ的な要因で気候が悪化している
- オ 彼は好調をイジしたまま大会を迎えた

問一 傍線部 X・Y の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

X 同定する

Y 趨勢

- | | |
|--------------------|--------------|
| ア 本来異なるものを同じ性質に変える | ア 権力を握っていること |
| イ 国家や公共団体が公式に定める | イ 進み向かう様子や動向 |
| ウ 同一であることを見きわめる | ウ 中心となる重要な部分 |
| エ 正式に決定するまで仮に決める | エ 物事の組み立てられ方 |
| オ 区別すべきものを同一とまちがえる | オ 実態が分からない様子 |

問二 空欄 1 ・ 2 に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- 1
- ア 分析し、強化させる
 - イ 統合し、一体化する
 - ウ 記録し、足跡を残す
 - エ 制御し、方向付ける
 - オ 公開し、通報させる

- 2
- ア 転用
 - イ 報道
 - ウ 網羅
 - エ 拡大
 - オ 中傷

問四 傍線部 A「ライフログ」が蓄積される理由について述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 自分自身で消費を行っている年齢の人間であれば、個人のプロフィールと消費の履歴を自分で管理しているため。

イ ICタグ付きリストバンドを用いて買い物や食事をする事ができ、ロッカーなどの認証にも使えるようにするため。

ウ サービスの利用者たちから得られる情報を大規模に分析し、そこから導かれる知見をビジネスに活用するため。

エ スマートフォンをはじめとする携帯端末の進化がめざましく、多種多様な機能を携帯電話に統合する必要があるため。

オ ソーシャルメディアの利用者が、プライベートとしか呼びようのないことがらを自発的に投稿し、公開しているため。

カ 私たち一人一人の個人データが無断で公開されており、誰にでも見る事ができる状態になっているため。

問五 傍線部 B「情報のネットワークが張り巡らされた社会」とはどのようなものか。次のア～オのうちから、適切なものを一つ選びなさい。

ア 監視の目や耳の所有者たちがいたるところに遍在し、必要に応じて市民生活に介入してくるような社会。

イ 国家の範囲をも越えた多種多様な機関によってモニタリングされ、複数の要素が連携して監視が成立する社会。

ウ 何百万人もの人々が集合してテレビとカメラを監視するため、だれが監視しているのかが見えにくくなっている社会。

エ 膨大な量の個人情報や蓄積したデータベースの分散化と相互統合によって監視網を築き上げていく社会。

オ さまざまなネットワークに結びつけられ、いつでもどのように自分の情報が集められているかを知ることができない社会。

問六 傍線部C「擬人化する比喩」とあるが、次のア～オのうちから、擬人法の表現を含むものを一つ選ばなさい。

ア こんなやみよのはらのなかをゆくときは

客車のまどはみんな水族館の窓になる (宮沢賢治「青森挽歌」)

イ ふるさとは遠きにありて思うもの

そして悲しくうたうもの (室生犀星「小景異情」)

ウ 僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る (高村光太郎「道程」)

エ われの^{きむ}叛きて行かざる道に

新しき樹木みな伐られたり。 (萩原朔太郎「小出新道」)

オ ああ おまえはなにをして来たのだと……

吹き来る風が私に云う (中原中也「帰郷」)

問七 傍線部D「〈創発する監視網〉」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選ばなさい。

ア ある個人を特定し攻撃を行うことを目的として、社会の至るところに設置されている。

イ ある出来事をきっかけに、バラバラに置かれた情報や装置が急速に組織化される。

ウ 動画配信サービスや日記を監視する一つの組織が、一時的に、しかし一気に活動する。

エ 車載カメラのように監視できる能力・機能を持った装置がつねに結びついている。

オ 監視網として機能しないときには、それぞれ別の役割や目的のもとで活動している。

問八 傍線部E「デジタル・テクノロジーのみによって説明されうるものではない」と考えられるのはなぜか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 特定の個人を攻撃しようとする同じ目的を持った組織が、既存の非デジタルな世界に常時潜んでいるため。

イ デジタルなネットワークの規模や常時性・網羅性を、人間は到底コントロールすることができないため。

ウ ソーシャル・メディアやネット掲示板、ニュースサイト、コメント欄などが存在しなくても監視は実現できるため。

エ 実空間にいる人々の不特定な行為や意志がネットワークに媒介されることで、執拗で網羅的な監視網が出現するため。

オ 社会内に分散的におかれた情報と装置を悪用する人々の行為や意志を、抑制することは不可能であるため。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

鈴木三重吉は^{*}『赤い鳥』の主宰者として多くの童話を書いたが、「ぼっぼのお手帳」のほかは、ほぼ再話・翻案作品である。それらすべてが上品で美しい文章で書かれており、三重吉の手になると西洋の童話のみならず日本の『古事記』までもが同様にエギンチックな、そして「純麗」な世界として浮かび上がる。端的に言えば、それが三重吉の「童話」であつた。しかし、『赤い鳥』は多くの作家や詩人たちを動員した「運動」であつたため、当時の知識人たちの子ども観の総体がそこに見られる。

『赤い鳥』は大正七(一九一八)年から昭和一一(一九三六)年まで続いたが、昭和四、五(一九二九、三〇)年の休刊をはさんで前期と後期に分けられる。筆者はかつて前期『赤い鳥』に描かれた〈子ども〉のイメージ(あるいは童話の世界のイメージ)を分析し、大別して「良い子」「弱い子」「純粋な子」という三つの基本的なイメージに整理した。i、これらは相互排他的なカテゴリーではなく、基本イメージが重なり合つて複合的なタイプを形成している場合のほうが多い。「良い子」や「純粋な子」は児童文学においては定番ながら、そこには『赤い鳥』特有の性格が見られる。また、「弱い子」が多く登場するのも『赤い鳥』の顕著な特徴である。

子どもの読み物にはたくさんの「良い子」たちが登場するが、^A『赤い鳥』の「良い子」たちの性質は、ほぼ同時期の人気児童雑誌『少年倶楽部』の「良い子」たちと比較すると、明白な違いが見られる。『少年倶楽部』は、少年たちの理想として「偉大なる人」となることを掲げ、「一生を通じて、その児童を鞭撻^{むち}するところの心棒を形造る」(本書の編集方針)ことを目指した。佐藤忠男は、それを「立身・英雄主義」と呼んだ。佐藤によれば『少年倶楽部』は、この「立身・英雄主義」を「子どもたちが主体的にかかわりあつてゆける観念」として提供することによって彼らの自我形成に積極的な役割を果たし、熱狂的に受け入れられた。その点、「いつまでも今の童心を大切に」としか語ってくれない『赤い鳥』の童話は、少年時代の佐藤にはなんの感銘も与えなかったという(『少年の理想主義』)。

しかし、こうした立身・英雄主義の称揚は、その後の時代の流れのなかで結局、軍国主義に向かつて一直線に進んでいくことになる。『少年倶楽部』の理想主義は、「個人の野心追求と国家の興隆との幸福な予定調和」(見田宗介)に立脚しており、したがって国家の枠をこえてゆく普遍主義的な方向性を持ち得なかった。他方、『赤い鳥』では、たとえば平等主義やコスモポリタニズムなど、より普遍主義的で状況超越的な価値観を受け入れる「良い子」たちが描かれる(有島生馬の「大将の子と巡査の子」や江口千代の「世界同盟」など)。とはいえ、その種の理想の実現に向かつて積極的に行動する「良い子」は、『赤い鳥』では少数派である。「一房の葡萄」(有島武郎)などに見られるように、行動よりもむしろ内面の問題が重視され、素直さ、優しさ、思いやり、反省す

る態度といった内面的属性における「良い子」が多数を占める。『少年倶楽部』の「良い子」がいれば「行動する良い子」であるのと対照的である。

『赤い鳥』の際立った特徴のひとつは、^B弱さへの感受性がたいへん強いことである。たとえば、貧困家庭の子どもや孤児、病気の子や心の弱い子、不当に虐待される子など、さまざまな種類の「弱い子」が頻繁に登場し、主人公のもつ何らかの弱さや弱者の悲哀が中心テーマとなる作品が多い。

「弱い子」のイメージは、しばしばセンチメンタリズムと結びつくが、それはいわば時代の好みでもあった。大正期日本は対外的には列強の仲間入りを果たし、国内では明治期近代化の一応の達成を見たこともあって、人びとの関心は「内面」や私生活の充実へと向かい、宗教ブームや消費生活の発展が生じた。しかし「大正デモクラシー」や華やかな消費生活の裏には、理想主義的運動の挫折や失敗があり、噴出する資本主義の矛盾になす術もなかった暗い世相もあった。「カチューシャの唄」に始まる当時の流行歌の系譜にふれて、鶴見俊輔は、これによって「日本人の感情処理の処方箋」が形成されたと述べているが、少し解釈を広げるなら、流行歌に限らず、弱さを前面に押し出したセンチメンタルな小説（たとえば『赤い鳥』にも多くの童話を書いている当時の流行作家、吉田紘二郎の作品）なども含めて、一般に大正期の文化は感傷を好み、それが人びとの感情を慰^い藉する「処方箋」ともなっていたといえよう。

もちろん『赤い鳥』の「弱い子」たち皆が過剰な感傷性をもつて描かれたわけではない。弱者に寄り添い、その過酷な現実を描き出したり、弱さのなかに強者には望めない独自の価値を見出そうとする作品なども少なくはなかった。

弱者を描き、その弱さを通してある種の理想主義を表現することに成功したのは、小川未明である。『赤い鳥』作品の「黒い人と赤い樫^{かし}」や彼の代表作「赤い蠟燭^{ろうそく}と人魚」（『東京朝日新聞』一九二二）では、見殺しにされた人びとの恨み、売られた人魚の悲しみが、激しい復讐の正義となって現れ、とつぜん舟が沈んだり、町全体が滅んでしまったりする。未明は、弱者の不幸は弱者を生み出す社会構造の問題であると考えて社会主義思想に近づいたが、その詩人的資質から、階級闘争による社会変革の物語よりはむしろ、神秘的・超越的な力による「詩的正義」の実現によって無^む辜の者の不幸が償われるという物語を通して、自らの理想を表現した。

児童文学に限らず、純粋さは近代文学に現れる子どもの代表的なキャラクターといえる。『赤い鳥』にもたくさんの「純粋な子」が登場する。なかには実際には考えにくいほど極端に純粋な子もいる。彼／彼女たちは、いわば「純粋さ」そのものを象徴する存在なのだ。

では「純粋な子」「良い子」「弱い子」のイメージをひとつに結び合わせるもの、あるいはそれらの共通の基盤になっているものは何なのか。それはやはり^C「無垢^{むこ}」の観念であろう。当時の作家や詩人たちは「子供の時の心」「永遠の子供」、あるいは「童心」といった言葉でそれを表した。大正

一〇（一九二二）年の『早稲田文学』六月号の特集「童話及童話劇についての感想」で、小川未明はこう書いている。

子供の時の心程^{はま}、自由に翼を伸ばすものは他にありません。また汚されていないものもありません。少年時代^{はと}程、率直に美しいものを見て、美しいと思い、悲しい事実に^あ遇って悲しく感じ、正義の一事に対して感憤を発するものは、他にはないのです。……私は、「童話」なるものを^{ひと}独り子供のためのものとは限らない。そして、子供の心を失わない、すべての人類に向つての文学であると主張するものです。（私が「童話」を書く時の心持）

のちにプロレタリア文化運動で活躍する秋田雨雀^{うしぐさ}も『赤い鳥』に童話を寄せているが、同じ特集のなかで次のように述べている。

童話の中に現わされた思想とその世界は、大人の理想の世界であると見ることも出来ます。そしてその世界に^お於てのみ子供と大人が「一つのもの」になり得るのです。その時の大人の魂と、子供の魂とは決して差別的ではありません。……童話は大人が児童に与えるために創作すべきものではなく、人類の持っている「永遠の子供」のために創作さるべきものであると思います。（芸術表現としての童話）

彼らのまなざしが向けられるのは「子供の心を失わない、すべての人類」「人類の持っている『永遠の子供』」といった理念的・抽象的な存在であつた。そのため後代の「児童文学」から「子ども不在の童心主義文学」と批判されることにもなるのだが、童話が「芸術表現」として深い意義を担う理由もまたそこにあつた。

「子ども心」＝「童心」を最も率直に^{ただ}称えたのは、『赤い鳥』で童謡面を担当した詩人の北原白秋である。彼は現実の子供たちの生き生きとした姿を捉えた点でいわゆる「童心主義」作家と²一線を画すが、白秋にとつてもまた、童心こそ、人間がもつべき最も重要な価値であつた。童心礼讃に満ちあふれた童謡論『緑の触角』で、彼は「児童は成人の父である」というワーズワースの詩句を引きながら「いかなる成人たりとも畢竟^{ひつもと}は本性としての童心を失い得るものではない。それ故にこそ人間の尊さはあるであらう」と述べている。

白秋は、新しい「童謡」の創造とは「わらべうた」を復興することだと考え、わらべうたにふくまれる土着的・伝統的な子ども観を強く前面に打ち出した。そして、ロマン主義的な「無垢」と民俗的な童子神（「聖なる子ども」）のイメージを巧みに重ね合わせ、また「^{ひいらぎ}聖心は童の心である」と、仏教的な境地までもそこに融合させている。「童心主義」はたしかに西洋近代文学から強い影響を受けてはいるが、決して単なる輸入品ではなかった。

さらに、日本的な「童心」の普及に重要な役割を果たしたのが、良寛を「童心の人」として世に広めた相馬御風^{ごふう}である。良寛について御風は二一冊にのぼる本を書いたが、最初の『大愚良寛』（大正七（一九一八）年）では、良寛はまだ人道主義的観点から「愛の人」と捉えられていた。だ

が文壇で大いに喧伝³された「童心」が、やがて御風の「良寛」論の枠組としても重要な意味をもつようになり、彼は「良寛和尚ほど、貴い童心の感化を受けた人は稀であろう」と述べるようになる。それまで郷土の偉人として知られるに過ぎなかった良寛のイメージは、御風の筆によって、子どもとまりつきをする親しみやすい姿とともに、折からの宗教ブームを背景に全国に広まった。こうして西洋のロマン主義的な「無垢」の観念は、『赤い鳥』を中心とした「童話・童謡」運動を通して「童心」へと鋳直され、さらに「良寛伝説」に裏打ちされて、日本人が伝統的に継承してきた優れた価値として認知されるようになったのである。

ii、産業化が急速に進展する当時の日本にあつて、「童心」の理念はいわば片隅の価値に過ぎなかった。善良さ、優しさ、弱さ、無力さ、純粋さなどに重きを置く価値は、産業化の推進に不可欠な合理主義や功利主義、業績主義などの支配的価値に逆行し、むしろ対立する。しかし富や権力をめぐる競争が激化するにつれ、逆に世俗にまみれない純粋さや無私への憧憬も強化される。大正期の大人たちは、自分たちが基本的に志向する——あるいは志向せざるを得ない——近代産業社会の価値体系からはずれた、むしろその対極にある価値を子どもたちの属性とすることによって、非世俗性への憧憬を掬い上げ、世俗の汚れを洗い流してくれる場を「童心」に求めたということができよう。

D『赤い鳥』の時代は、それほど長くは続かなかった。昭和期に入つて軍国主義的な風潮が強まるとともに、童心文学の黄金時代は終焉に向かう。そして、「童心主義」理念の一部は、当時の国粋主義や軍国主義思想と微妙に響きあつていく形をとることになる。

(河原和枝「鈴木三重吉・『赤い鳥』と童心主義」)

*『赤い鳥』：大正七年（一九一八）に創刊された児童文芸雑誌。

※引用文中の旧仮名遣いは、すべて現代仮名遣いに改めた。

問一 波線部1～3の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1 エギゾチックな | 2 一線を画す | 3 喧伝する |
| ア 異国情緒がある | ア 共通項が見いだせる | ア 盛んに言いやすい |
| イ 架空の世界のような | イ 強い絆で結ばれる | イ 努力して広める |
| ウ 興味を感じさせる | ウ 明確に区別される | ウ 激しく議論する |
| エ 純粋で美しい | エ わずかな違いがある | エ ゆがめて伝える |

問一 空欄 i ・ ii に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|------|----|---|-------|
| i | ア | そのため | ii | ア | もはや |
| | イ | むしろ | | イ | とはいえ |
| | ウ | もちろん | | ウ | つまり |
| | エ | やはり | | エ | それよりも |

問二 傍線部 A 「『赤い鳥』の「良い子」たち」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 将来「偉大なる人」となるのを目指すことが、「良い子」の理想的な姿であるとされた。
- イ 「良い子」となろうとすることで、自我形成に積極的な役割を果たすことが期待された。
- ウ 「良い子」の英雄主義は、軍国主義に進んでいく中で単なる理想主義に陥ることとなった。
- エ 平等主義のような、国家の枠を超えた価値観を受け入れられる「良い子」が描かれた。
- オ 単に行動するだけではなく、内面に抱える問題を克服する子どもが「良い子」とされた。

問四 傍線部 B 「弱さへの感受性」とあるが、『赤い鳥』に描かれた弱さについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 「弱い子」のイメージは、流行歌にも見られるように大正期のセンチメンタリズムと結びついていた。
- イ 単に弱さを前面に押し出すだけでなく、弱さのなかに強者には望めない独自の価値を認めようとする作品も作られた。
- ウ 華やかな消費生活の裏で資本主義の矛盾が噴出し、大量の弱者を生み出したことが童話作家を創作に駆り立てた。
- エ 小川未明は無実の弱者が神秘的な力によって救済される物語を描くことで、自らの理想を表現した。
- オ 小川未明の作品の背景には、弱者の不幸は弱者を生み出す社会構造の問題であるとの考えがある。

問五 傍線部C「「無垢」の観念」とあるが、当時の児童文学における「無垢」の観念について述べた次のア～オのうちから、適切なものを一つ選びなさい。

ア 『赤い鳥』に登場する子どもたちのイメージの共通の土台となるものが、「童心」という言葉で表現された。

イ 児童文学では童心が理論的・抽象的な存在として描かれたために、「芸術表現」として批判を受けることにもなった。

ウ 小川未明は、子どもの心は自由で無垢であり、童話はその心を失わない全人類に向けられるものであると考えた。

エ 秋田雨雀は、童話の世界は大人の理想の世界でもあり、そこにおいては大人と子どもとの魂は同じものになり得ると考えた。

オ 童謡で子どもたちの姿を描いた北原白秋は、童心は最も重要な価値であり、それを失わないことに人間の尊さがあると考えた。

問六 傍線部D「『赤い鳥』の時代は、それほど長くは続かなかった」とあるが、この時代のできごとについて述べた次のア～オのうちから、適切なものを一つ選びなさい。

ア 北原白秋は、西洋文学の影響のもとで生まれた「童心主義」に日本の民俗的な信仰や仏教的な境地までも融合させた。

イ 童心の感化を受けたことで郷土の偉人として知られていた良寛は、相馬御風によって全国に知られることになった。

ウ 西洋からもたらされた「無垢」の観念は、日本人が伝統的に継承してきた人道主義と結び付いて童話や童謡に影響を与えた。

エ 産業化が推進され合理主義や功利主義に重きが置かれる日本にあつて、弱さを重んじる童心主義は批判の対象となった。

オ 大人たちは、産業社会の業績主義の対極にある純粋さや無私に対するあこがれを満たす場を童心に求めることになった。